

第 122 号

平成二十九年 前期
研究大会・研修会特集
各支部・各学校より



可愛がってもらえる人に

三河教育研究会 副会長
伊藤 映 充



義務教育の仕上げとしての中学校は、社会人としての基礎を身につける大事な三年間だと思っています。それは、小学校で伸び伸び育ってきた子どもたちが、

いろいろな考え方に折り合いをつけながら、他者との関わりの中で一つのことを協力して成し遂げていく喜び、達成感等を体感できるチャンスだからです。

本校では、十三年目を迎える全校ダンスと十一年目を迎える全校合唱という、全校で一つのものを創り上げる取り組みを続けています。

全校ダンスを始めたいきっかけは、学校が荒れていた時に、生徒のエネルギーをプラスの面で発揮させ、一体感を感じ取らせたいという思いからでした。「とにかく、みんなで一つになって踊ろう」ということでスタートしました。全校生徒で一つのものを創り上げるには計画、準備、練習、本番と、多くのエネルギーが必要で、全校ダンス十年を経過した時に、学校は落ち着いていたので、区切りをつけて全校ダンスを止めることを含めて見直しを生徒会に提案しました。返っ

てきた答えは、学校の伝統として続けた、自分たちのこだわり(テーマ)をもつてその年々のダンスを目指したいということでした。勢いにこだわる、指先まで伸ばすことにこだわる等、生徒会執行部とダンスリーダーを中心に全校ダンスは引き継がれています。

全校合唱については、「明日へ」という曲が歌い継がれてきました。歌詞の内容には歌い始めた時からの思いがあつたものです。本校は、昨年度、創立七十年を迎えました。年度末の二月に行われた「三年生を送る会」で、「二年生へ三年生から「進め、幸中」というエールが送られました。伝統を大事にしつつ、七十一年目の新たなページを作っていくってほしいというメッセージに聞こえました。これを受けて、生徒会執行部と現三年生は、

歌い継がれて十年経過した全校合唱を「輝くために」という曲に変えて挑戦することにしました。

全校で一つのものを創り上げることができるのは、日頃の学校や家庭等でのよい人間関係が土台にあることが前提です。授業で発言しやすい、学級で意見が言い合える、次の日のエネルギーを家庭で蓄えられる等、子どもたちが育つ土壌が三河にはあると思います。

義務教育を終えていく子どもたちの心の成長が、社会にでた時に一人の人としての動きに役立ち、いろいろな人に可愛がってもらえる人となることを願わずにはいられません。

学び続ける教師を目指して

三河女性役職者会 会長
岩井 伸 江



今、最も注目されている中学生と言えば、藤井聡太四段ではないでしょうか。二十九連勝という圧倒的な将棋の強さだけでなく、「実力からすると、望外の結果」(十一連勝、四月四日)、「僥倖としか言いようがない」(二十連勝、六月二日)といったインタビューで語る彼の言葉が心に残った人も少なくないと思います。彼の言葉には、

将棋に対する真摯な姿勢だけでなく、中学生とは思えない語彙力の豊かさを感じます。また、それと共に、それを自分の言葉として発していることに、驚きの気持ちをもたずにはいられません。

小学校四年生の頃から、毎日、学校から帰ると新聞を開き、一面を見た後、社会面、将棋欄に目を通し、ページを前方にめくっていく……といった新聞について語る彼のインタビュー記事(中日新聞、四月六日)を読んだとき、その秘密を知ったような気がしました。

今回、改訂された新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」をキーワードに、知識だけでなく、得た知識を活用

して課題を解決する力の育成が求められています。そして、そのためにどういった授業改善を目指していったらよいか、私たち教師にも「主体的・対話的で深い学び」が肝要です。自分から主体的に新聞を開き、そこからたくさん学び、自分の知識として吸収し、自分の言葉とすることで、深い学びにしている藤井四段からは、私たちが目指す子ども像の一例を見ただけでなく、私たち教師自身に求められている学びの姿も示されているように思います。

今夏、三河各地で三教研の研修会が行われ、私もいくつかの研修会に参加しました。私も含め、多くの先生方が様々な実践にふれ、そこから学ぶことがたくさんあったことと思います。そういった教師自身の主体的に学ぶ姿勢や意欲が、子どもたちの興味・関心や意欲を喚起し、「分かった」「できた」という充足感や満足感を体得させる授業、「もつと知りた

い」「もつと学びたい」という思いをもたせる授業を創る源になるのではないのでしょうか。そして、藤井四段の語彙が継続的に新聞を読むことで育まれてきたように、よりよい授業を目指す仲間との研鑽を積み重ねていくことが、「主体的・対話的で深い学び」の育成につながっていくと信じています。

これからも、三教研が三河の教師集団の学ぶ場としての拠り所であると共に、私自身も学び続ける教師でありたいと思います。

子どもを中心に据えた三河教育の推進

—平成29年度 研究大会・夏季研修会を終えて—

総務委員会

総務委員会では、五月十七日の定期総会以降、役員会・常任委員会を開催し、常任委員会の活動計画や各部会・各種委員会の夏季研修会等の充実について、協議を重ねてまいりました。

本年度は、夏季休業中に十四の研究大会・研修会が開かれました。子どもが生き生きと学ぶ姿を目ざし、よりよい授業づくりのヒントを得ようと活発な議論が展開されました。今秋には八つの研究大会が計画されています。なお、研究大会・研修会で提案された指導案は、ホームページに随時掲載していきます。

授業力養成講座Ⅰは、八月二十三日に蒲郡市民会館にて、二十五日に安城市教育センターにて開催しました。約一三〇名の受講者が集い、熱心に研修が進められました。研究大会や研修会、授業力養成講座で学んだことを、子どもを中心に据えた教育の推進に生かしていただくことを期待します。

最後になりましたが、研究大会・研修会の運営に際し、関係市町村教育委員会・関係機関の方々にお世話いただきましたことに感謝申し上げます。

部会・各種委員会

研究大会・研修会の報告

国語

生きてはたらく言葉の力を育み、深く学び合う授業

平成二十九年度 国語部会夏季研修会
期日 八月八日(火)
場所 ライフポートとよはし
参加者 三百六十八名
講演会「声を育て、学びを深める」
〔絵本の読みあいを中心に〕
講師 ノートルダム清心女子大学教授 村中 李衣 先生

多くの先生方のご参加を得て、午前中は七つの分科会に分かれて研究協議を行いました。午後からは全体会と講演会を行いました。午前の分科会では、研究テーマ「生きてはたらく言葉の力を育み、深く学び合う授業」にそった実践について提案がなされました。協議会では、生きてはたらく言葉の力を育むとはどのようなことか、また、子ども同士が互いに深く学び合う授業づくりをどのように行うべきかについて、提案者の確かな実践をもとにした活発な議論が展開されました。

午後の講演会では、ノートルダム清心女子大学教授である、村中李衣先生を講師にお迎えしました。講演では、小学四年の国語の教科書に掲載されている「走れ」の話はもちろんのこと、声をとおして心を相手に伝える大切さに関するお話を多くいただきました。声を使ったレク

リエーション的な活動に参加者も実際に行い、楽しみながら、声の大切さを実感しました。また、子どもがつくった絵本や英語の翻訳なども紹介していただき、とても実りのある時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、本研修会を支えてくださった豊橋地区の先生方、提案・助言・司会の先生方により感謝申し上げます。



ご講演される村中李衣先生

日常生活に生きる授業を

豊橋・玉川小 磯村 亜未
午前の分科会では、「書写」の分科会に参加しました。今回の分科会に参加して、「習字の授業」お手本どおり書く」だけで終えずに、日常生活の硬筆に生かしていくことが大切だと学びました。私たちの生活の中には、たくさん文字があります。分科会での協議をとおして、日頃から、文字に関心をもつて、丁寧に文字に接していく姿勢を子どもに身につけてほしいと考えるようになりました。

午後の講演会では、村中李衣先生の楽しくて、ためになるお話を聴くことができました。音を体で表現する活動が印象的で、自分の学級の子どもにも体験させたいと思いました。私も、目の前の子どもに、きちんと自分の声や心を伝えられる教師になりたいと思いました。

書写

平成二十九年度 書写実技講習会
期日 七月二十八日(金)
場所 岡崎市竜美丘会館
参加者 四十七名
講演・実技講師 岐阜女子大学教授 中根 海童 先生

文字文化を大切にしたい軟筆指導

高浜・高浜中 伊藤あゆみ
学習指導要領の改訂において、小学一年から「軟筆」を取り入れることを示唆する文言が加えられたとして、実際に水筆ペンと専用の半紙を使いながら軟筆指導法について学びました。毛筆と同じように筆を使うことで、字形を正しく捉えることができ、文字に対する意識を高めることができると同時に、「とめ・はね・はらい」などの運筆能力を適切に身につけることができるので、硬筆の技能も上がるということを学びました。水筆ペンは、墨で汚れることもないので、低学年でも気がねなく取り入れられます。筆の弾力を感じながら文字に親しむことができる軟筆のよさにふれ、充実した研修となりました。



書写実技に取り組む様子

算数・数学

主体的・協働的に学ぶ 算数・数学教育の実践

平成二十九年度
算数数学部会夏季研修会
期 日 八月二日(水)
場 所 新城文化会館
参加者 三百七十六名
講演会「わくわく数の世界の大冒険
世界は数学でできている」
講師 株式会社 sakurAi Science
Factory 代表取締役
桜井 進 氏

平成二十九年度算数数学部会夏季研修会
新城大会を、八月二日に新城文化会館で開催しました。
午前は、小中学校あわせて十二の提案を六分科会に分かれて協議しました。それぞれの分科会で、「主体的・協働的に学ぶ算数・数学教育の実践」のテーマのもと、「学び合い」「数学的活動」「数学的な思考力・表現力」などをキーワードに各校の実践が提案され、活発な討議が行われました。また、大学の先生方から、実践に対する改善点や、今後の授業に役立つご助言をいただき、たいへん充実した研修の機会となりました。
午後は、株式会社 sakurAi Science Factory 代表取締役の桜井進氏より、「わくわく数の世界の大冒険 世界は数学で

できている」という演題で講演をしていただきました。コピー用紙を折り曲げた厚さと宇宙の大きさの関係、小惑星探査機「はやぶさ」の軌道計算に利用された円周率の桁数、三角関数の誕生秘話などを例に、数学の神秘について熱く語る桜井先生のお言葉から、「世界は数学でできている」ことを再認識しました。子どもたちに数学を学ぶことのすばらしさを伝えたいという思いを強くすることができました。



ご講演をされる桜井進氏

数学のすばらしさを伝えたい

碧南・新川中 岡田 将志

主体的に学ぶこと、協働的に学ぶことを意識した授業をしたいと考え、中学校の分科会に参加しました。ペア、グループ、学級全体など、場面に応じた学習スタイルや、学んだことをレポートにまとめる場を取り入れた実践を聞くことができ、とても参考になりました。

講演会では、身のまわりに存在する数学から、数学の奥深さについて改めて考えさせられました。自分自身が知らないことに出会える楽しさを伝えられるような授業づくりに取り組んでいます。

技術・家庭(小学校家庭科)

未来を創り出す豊かな心と 確かな実践力を育む家庭科教育

平成二十九年度
技術・家庭部会夏季研修会
(小学校家庭科部会)
期 日 八月二日(水)
場 所 田原文化会館 他
参加者 百五十四名
指導講話
「三教研を卒業するにあたって
考えたこと」
講師 愛知教育大学 教授
加藤 祥子 先生

今年度は、田原市で夏季研修会を開催したところ、多くの先生方にご参加いただき、有意義な研修会となりました。
研究発表では、三教研技術・家庭部会家庭生活と家族班から、アイロンがけや食事作りを通して、家庭の仕事の技術を身につけ、学びを生活に生かすことで家族とかかわる時間を増加させた授業実践が報告されました。田原地区からは、食事作りや手縫い作品の学習において、魅力ある題材の設定、家族や他校との交流活動、技能習得させる工夫などを取り入れることで、自信をもって自分の学びを生活に生かそうとする子ども姿が見られた研究が報告されました。どちらの報告も確かな実践力が育まれた実践であり、参考となりました。また、岡崎地区からは、来年度の愛知県家庭科教育研究大会の開

催に向け、「持続可能な社会の構築を視点とした『消費生活と環境』の授業づくり」について中間発表がされました。

指導講話では、三教研技術・家庭部会の常任講師としてこれまでの体験を踏まえた具体的なお話から、多くのご示唆をいただきました。

午後は、田原地区の先生方に計画していただいた勾玉作り、夏野菜の調理実習、ソーセージ作り、ブーケ作り、組子細工の実技研修を各会場で行いました。
田原の豊かな自然や文化、人々の温かさに触れた一日でした。講師の先生、ご来賓の皆様、田原地区の先生方はじめ多くの先生方に、心より感謝申し上げます。



加藤祥子先生による講話

夏季研修会を終えて

田原・若戸小 柳瀬 裕子

研究発表では、生活に生かす力をテーマにした実践例が取り上げられ、子どもたちが自信をもって家庭で実践した姿が伝わり、とても参考になりました。
午後の研修では、田原地区ならではの实技研修が開催されました。ブーケ作りに参加し、美しい花に触れながら楽しく活動することができました。

今回の研修で学んだことをこれから授業実践に生かし、子どもたちのために力を高めていきたいと思えます。

技術・家庭（愛技研）

よりよい生活に向けて、
最適解を求め続ける生徒の育成
〜考えの広がりや深まりを大切にした
問題解決的な授業を通して〜

平成二十九年 度

技術・家庭部会夏季研修会

期 日 八月四日（金）

場 所 幸田町民会館

参加者 百三十八名

助言者 愛知教育大学 教授

太田 弘一 先生

愛知教育大学 教授

青木香保里 先生

開会行事では、濱田康司部会長のあいさつに続いて、三河教育研究会副会長の伊藤映充先生に主催者のあいさつをいただきました。

全体会では、専門班より、問題解決的な授業を行うための単元づくりについての提案がありました。子どもの思考の流れを意識した授業過程のつくり方について、段階ごとに教師がすべきことを、技術分野では電気回路について、家庭分野では和服についての授業実践例をもとに、提案されました。また、問題解決的な授業をするにあたり、今日的な課題についての情報の収集の仕方についても紹介がありました。

分科会では初めに、分野ごとに、岡崎地区、安城地区の実践および、教材紹介が行われました。子どもが問題意識を強くもち、追究を進めていくために、子ど

もの考えを深

める発問を盛

り込むことの

必要性など

を学びまし

た。分野別研

修会では、小

グループに分

かれ、領域ご

とのテーマに

沿って協議会

を行いました。

日頃の実践

や授業づくり

の悩みを共有

して、これか

らの授業づく

りについての

情報交換の場

となりました。

また、愛知教

育大学教授

の太田弘一先

生、青木香保

里先生による

ご助言からは

、子どもに獲

得させたい価

値を明確にし

て、授業をつ

くつていくこ



提案の様子

とが大切だと教わりました。最後に、ご尽力いただいた専門班の先生、岡崎地区、安城地区の先生方に深く感謝申し上げます。

子どもの思いを大切に

西尾・西尾中 鶴詞 礼美

専門班の提案や、岡崎・安城地区の発表では、子どもが実際に体験したり、取材をしたりしながら、さまざまな考えを獲得していくことができるように工夫がされていました。

研修会を通して、現代的な課題へのアテナを高くもち、教材研究に取り組んでいきたいと思われました。また、他地区の先生方との情報交換は、各校一人で担当することも多い教科・分野なので、とても貴重な機会となりました。

特別支援教育

一人一人の教育的ニーズに応じた
教育のあり方をめざして

平成二十九年 度

特別支援教育部会夏季研修会

期 日 八月二日（水）

場 所 碧南市文化会館・中部公民館

参加者 四百四十三名

講演会 「優生思想と特別支援教育」

講師 愛知教育大学 教授

吉岡 恒生 先生

開会行事では、清水文克部会長、加藤宏基三河教育研究会役員のあいさつに続き、高浜市教育委員会教育長の都築公人様からご祝辞をいただきました。

講演会では、講師の吉岡恒生先生から、優生思想の歴史、出生前診断、日本の優生思想、特別支援教育と優生思想など、優生思想というキーワードを切り口として、障害者が辿った苛烈な歴史を紐解きながらご講演をいただきました。また、知能検査や出生前診断などの検査内容や、検査が確立するまでの流れを教えてくださいました。



ご講演される吉岡恒生先生

特別支援教育に携わる指導者としての知識だけでなく、障害のある方と共に歩んでいくためにはどうしたらよいのか考

える機会をいただきました。

午後は、七つの分科会に分かれ、提案者の先生方から、明日からの授業にすぐに生かすことのできる実践発表がありました。また、グループ討議では、各分科会のテーマに沿っての意見交換や、先生方が日頃取り組まれている課題やその対策等についての情報交換がなされました。

最後になりますが、高浜・碧南市教育委員会をはじめ、高浜・碧南地区の先生方のご協力により、有意義で、充実した研修会になりました。ありがとうございました。

自信につながる確かな学びを

豊橋・飯村小 白井 千佳

子どもたち一人一人の確かな学びにつなげていくためには、魅力ある教材の開発と学習の積み重ねがとても大切であることを改めて感じるようになりました。分科会でキーワードとなった言葉は「繰り返し返し」です。子どもたちの実態を正しく捉え、スモールステップによる学びの連続性を丁寧に見取っていくことで、確かな学びになっていくのだと思います。

子どもたちが成功体験を重ねながら、自信をもって意欲的に取り組めるような実践を心がけていきたいと思

養護教諭

養護教諭の資質向上と

健康教育の推進

平成二十九年年度

養護教諭部会夏季研修会

期 日 八月三日(木)

場 所 蒲郡市民会館

参加者 四百七名

講演会 「これからの保健指導の在り方について」

―性に関する指導を例として―

講師 筑波大学体育系 教授

野津 有司 先生

開会行事に次ぐ実践発表では、高浜市養護教諭部会からは、「自ら危険に気づき、安全な生活を送る高浜っ子の育成 ―市内統一の保健安全指導・研修を通して―」と題して、口頭発表がありました。市内統一で緊急対応マニュアルを整備し、シミュレーション演習を積み重ねたことで、教職員の危機管理の意識が高まり、緊急時に職員が迅速に判断し行動できるようになったという成果を発表されました。

豊橋市養護研究部課題研究部会からは、「生涯にわたって、歯と歯肉を大切にできる子の育成 ―「気づき」や「やる気」を育てる歯科保健指導を中心として―」と題して、紙上発表がありました。口の中の状態と生活習慣を点検できる「セルフチェックカード」の活用、発達段階に応じた保健指導を行い、歯や歯肉を大切にしようとする意欲とやる気を継続させる実践が紹介されました。

調査研究発表では、「養護教諭が行う保

健指導の充実」と題し、六年間の研究の成果が報告されました。養護教諭の保健指導への積極的な取り組みと指導力向上のために、「ふり返りカード(評価票)」を今後も活用していきたいと思われました。

常任講師の愛知教育大学准教授の山田浩平先生からは、実践発表と調査研究委員の行った研究について、成果と今後の研究への助言及び講評をいただきました。

野津先生の講演会では、性に関する指導を通して、主体的に正しい情報を入手したり、信頼できる大人に相談したりしながら、自ら思考・判断し、適切に行動できる力をもった子を育むことの大切さを学びました。夢と希望がもてるようになる、明るく楽しい健康教育を目指してほしいというエールが送られました。



ご講演される野津有司先生

夏季研修会に参加して

刈谷・小垣江小 津田 稚代

高浜市・豊橋市の発表から、安全指導歯科教育について包括的で効果的な実践を、調査研究部の報告では、保健指導において行動変容を促すために意識すべきことを学ばせていただきました。

野津有司先生の講演では、養護教諭の専門性の生かし方について改めて考えることができました。多くの学びと意欲をいただいた研修会でした。

総合的な学習

自ら探究し、協同的に学び合う 総合的な学習の授業(一年次)

平成二十九年年度

総合的な学習部会夏季研修会

期 日 八月一日(火)

場 所 安城市文化センター

参加者 二百十名

講演会 「新学習指導要領が求める授業と学校」

講師 甲南女子大学 人間科学部教授

村川 雅弘 先生



ご講演される村川雅弘先生

村川先生は、ご講演の中で、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングについてお話しされました。実践例をもとにした内容で、総合的な学習だけでなく、教科と教科で横断的な学習をしていくことの大切さについて解説をしていただきました。

その後、五つの分科会に分かれて、地域教材などをテーマにした十地区からの分科会ごとに協議が行われました。各分科

会に参加してくださった方々との熱心な意見交換や、助言者の先生のご助言により、充実した時間を過ごすことができました。

夏季研修会に参加して

豊橋・杉山小 三輪田真司

目標の設定や指導法の工夫が、各学校に任されている総合的な学習の時間では、教員の指導力、創造性が求められています。今回参加した分科会では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のヒントを見つけることができました。

一つ目の福祉を題材とした実践では、教師が生徒の変容前後の姿を想定し、意図的・計画的に福祉施設での活動を繰り返し設定した学習活動が展開されていました。

二つ目の自己の生き方を考えるキャリア教育の実践では、ゲストティーチャーを活用することで本物にふれるだけでなく、生き方を学び、人と人とのつながりの大切さに気づくことができる対話を重視した学習が行われていました。特に身近な保護者をゲストティーチャーとする発想は、効果的に地域と深くつながることができ、単元づくりに新たな可能性を広げていました。

体験活動で実感したり、ゲストティーチャーと関わったりすることは、新しい価値観を生み出すことになり、生徒自身の学習課題の解決や、より深い探究につながる有効な手立てであると再認識することができました。

学習情報

ネットワーク社会におけるメディアと ヒューマンコミュニケーション

平成二十九年年度 ICT活用研究会
期 日 八月二日(水)
場 所 豊田市民文化会館
参加者 二百三十五名
発表テーマおよび提案者
①「ICT機器の活用を目指して」
新城・東陽小 内山 智 先生
②「自作教材を利用した
授業展開について」
田原・亀山小 内藤利江子 先生
③「学習意欲を高めるとともに、
子どもが自ら違いを発見する
自作教材の作製」
岡崎・北中 太田 尚志 先生
④「いきいきと学習する子どもの育成」
西尾・鶴城中 鈴木 浩太 先生
⑤「タブレット端末を活用した
学び合いの授業づくり」
みよし・中部小 里澤 聡洋 先生
助言・講評

岡崎市立新香山中学校長
名倉 嘉章 先生

平成二十九年年度ICT活用研究会を八月二日に豊田市民文化会館で開催しました。

各地区からの提案では、ICT機器の活用や自作教材の開発など、今日的かつ多岐に渡った内容が発表されました。助

言、講評をいただいた名倉先生からは、ICTのよさを生かして、主体的・対話的で深い学びのある実践を行うために、ICT環境を築く視点を現場の教師一人一人がもつことの大切さを教えていただきました。ICT機器を授業でどのように生かしていくのかについて、たいへん中身の濃い研修の機会となりました。

ICT活用研究に参加して

新城・東陽小 内山 智

本研究会では、タブレット端末の活用実践や自作のデジタル教材の紹介など、興味深い報告が行われました。各地区で、導入されたタブレット端末を体育、理科、図工と教科の枠を超え、活用している授業実践の紹介は、とても参考になりました。

また、名倉嘉章先生が指導講評で話された「タブレット端末をどう使っていくか」は、とても印象に残りました。各地区での配備の状況や導入されたソフトウェアは異なっていますが、タブレット端末の長所を活用し、目の前の子どもたちが目を輝かせて学習に取り組めるようにしていきたいと強く思いました。

今回学んだことを、今後のICT機器活用に生かしたいです。



助言・講評をされる名倉嘉章先生

理科

自然を意欲的に追究し、 豊かな心と創造力を培う理科学習

平成二十九年年度
愛知県立小学校理科教育研究発表会
期 日 八月四日(金)
場 所 新城文化会館
参加者 二百三十五名
講演会 「今、理科教育に
何が求められているか」

講師 文部科学省国立教育政策研究所
教育課程研究センター研究開発部
教育課程調査官
遠山 一郎 先生

先生方からも「これからのような授業づくりをしていくべきかのポイントがはっきりした」「今後の協議会、校内研修で伝えていきたい」「三河の理科教育は今まで通り、さらに意欲的に進めていけばよいことが再確認できた」「学習指導要領改訂の目的が分かった」「改訂の言葉のとらえについて、本校内で考えているものと違いがあったので、広めていきたい」といったご意見をたくさんいただくことができました。

小学校下学年、小学校上学年、中学校の三つの分科会では、それぞれ二つの地区から提案された具体的な実践をもとに協議を行いました。分科会においても多くの質問、ご意見をいただき、今後の実践に生かしていきたいとのご意見をいただくことができました。

子どもの表現力を育てる手立て

豊橋・つじが丘小 柳沼 芳樹
問題解決学習を進めていくなかで、子どもたちが観察・実験の考察を自分の言葉で表現する場面を意図的に設定した「電気の性質とその利用」の実践を行い、提案しました。

分科会では、文型を工夫したワークシートが、子どもたちの考察を自分の言葉で表記する上で有効な手立てであったというご意見をいただくことができました。

今後も、子どもたちの表現力を育てつつ、教材の特性を生かした問題解決学習を追究していきたいと思えます。



分科会での活発な議論

話しただくことで、子どもたちが身につけておくべき理科の資質・能力を具体的に示していただきました。参加された

生活科

自らの生活を切り拓く子ども
子どものつばやきに耳を傾け、
対話を大切にして、思考を深める授業

平成二十九年年度
第二十四回愛知県生活科教育研究大会
期 日 八月四日(金)
場 所 蒲郡市民会館
参加者 二百二十名
講演会 「学習指導要領の改訂
—主体的・対話的—」

講師 國學院大學 教授
田村 学 先生

本年度の愛知県生活科教育研究大会は、蒲郡市にて約二百二十名の参加者を迎え開催することができました。

三つの分科会では、思考を深め、気付きを生むための手だてを意識した質の高いレポートが提案され、参加者からは夏休み以降の実践で参考になるという多くの声を聞くことができました。助言者の大学教授や准教授の方々からは、「思考」に焦点を当てた研究の具体的な事例を挙げ、思考を深めるための手だてを示していただくなど、今後の実践を深めていく上での、貴重なご助言をいただくことができました。

講演では、新学習指導要領のポイントとなる事柄を詳しく教えていただきました。指導要領が変わっても、これまで生活科部会が目指してきた「気付きの質を高める」授業を追究することが、「主体的・対話的」で深い学びにつながるっていくということがわかりました。また、「実践

例を挙げて話していただき、指導要領で大切にしていることが具体的に理解できた」といって、参加者からの多くの声を聞くことができました。

最後に、本大会を開催するにあたりお世話になりました、蒲郡支部の先生方に深く感謝申し上げます。



ご講演される田村学先生

提案を通して

豊橋・大村小 安藤 佐織
「おいしい野菜を作って大好きな人と一緒に食べたい」という思いや願いをもってスタートさせた野菜栽培。栽培活動を通して生じる悩みや困難と向き合い、友達とかかわり合いながら世話の仕方を何度も見直すことで、野菜への愛着を深めていく実践を提案しました。分科会では、同じような実践に取り組んでみえる先生方も多く、「野菜への出会わせ方の工夫」や「継続して栽培活動に取り組む手立て」などの意見をいただき、大変参考になりました。また、名古屋大学の久野先生からもご助言をいただき、単元が終わってからも学びが続く単元構想の工夫とはどういうものかを考えるよい機会となりました。今後子どもたちの思いや願いを大切に、対話を通して思考を深められる教材開発に取り組んでいきたいと思えます。

特別活動

豊かな心とたくましく
実践する力を育てる特別活動
主体的協働的に取り組む集団活動を通して(二年次)

平成二十九年年度
特別活動部会夏季研修会
第四回愛知県小中学校特別活動研究大会
期 日 八月十日(木)
場 所 岡崎市民会館 甲山会館
参加者 二百五十三名
講演会 「イジメ」温故知新

講師 エスケイ代表取締役社長
麓 聡一郎 氏

講演会では、昨年度に引き続き、麓聡一郎氏よりお話をいただきました。「イジメの原因と、限りなくゼロに近づける方法」についてご講演くださいました。「イジメをする子どもたちへの対応の基本」として、麓氏が言われた『承認の言葉』



ご講演される麓聡一郎氏

を、二学期からぜひ活用していきたいと思えました」という声がたくさん集まり、昨年同様大変好評な講演会になりました。講演会後は、小中学校ごとに分科会を開催しました。四名の先生から提案をし

ていただき、活発な協議が行われました。参加された先生からは、「学級活動や児童会活動において、今後の参考になることが多かったです。望ましい集団づくりをめざし、頑張っている先生方から刺激をいただくことができました」といった内容の感想が多数寄せられました。研修会を開催するにあたり、岡崎地区特活部の先生方に、たくさん協力をしていただきました。本当にありがとうございました。

対話的活動の重要性を知って

碧南・棚尾小 澤田 瑞季

今回の夏季研において、前任校での取り組みを発信する機会をいただくことができました。実践を思い返し、資料としてまとめる際に、新たな成果を発見したり、多くの先生から助言や質問をいただいたりしたことで、自分の考えをより深めることができました。さらに、発表準備から協議会までの自身の学びを通して、子どもたちに必要とされる対話的活動の重要性も再確認しました。また、周りの先生方に肯定的に話を聞いてもらえる雰囲気は、緊張している私の心をほぐしてくれました。これは、学級に所属する子どもたちも同じだと思います。

実践発表を経験させていただくことで、多くの学びを得ることができました。今後も特別活動の軸である学級経営を中心に、子どもが主体的に活動できるように支援していきたいです。

学校図書館

学び合い

豊かな心を育む

学校図書館

平成二十九年年度

第五十四回愛知県学校図書館研究大会

期 日 八月十八日（金）

場 所 津島市生涯学習センター

参加者 三百六十二名

記念講演会

「愛知県津島市出身

ブックディレクター 幅 允孝の仕事」

有限会社BACH代表

ブックディレクター 幅 允孝氏

記念講演会では、ブックディレクターとして本にまつわる様々なことを扱い、日本全国で活躍されている幅允孝氏をお迎えしました。軽快な語り口のなかに、ネット販売の隆盛により、未知の本との出会いが減りつつある現代だからこそ、異業種の中かにライブラリーや本の売り場をつくり、本を人のいる場所へと持っていこうとする強い思いが込められており、素晴らしい講演でした。人と本との結び目を探り、未知の本との幸福な出会いをもたらし、その大切さや、「運効性の道具」としての本の価値などについて、改めて認識を深める機会となりました。

午後は、分科会とワークショップが行われました。分科会では、各テーマに基づいて、小・中・高の先生方から提案が



ご講演される幅允孝氏

なされました。ワークショップでは、今後の活動に役立つ技能などを学びました。

学校図書館のよりよき活用に向けて

幸田・幸田中 山本 弘文

中学校部会の学習・情報センターの分科会に参加しました。学習センター作りの実践や、学校図書館を利用した福祉学習への取り組みなど、魅力的な提案をお聞きすることができました。また、その後の協議会では、各校で取り組まれている様々な工夫を知ることができました。

学校図書館教育のねらいをふまえた上で、適切な資料をそろえ、子どもが活用しやすい環境を整えることの重要性を改めて学ばせていただきました。

保健体育

課題に気づき、解決に向けて

主体的に活動する体育学習

〈二年次〉

平成二十九年年度 保健体育部会夏季研修会

（第六十一回全国小学校体育科教育研究会・豊橋大会との共催）

期 日 八月二日（水）・三日（木）

場 所 ライフポートとよはし

参加者 四百二名

講演会「体育の価値と授業づくり」

講師 日本体育大学体育学部健康学科 教授 白旗 和也 先生

第一日・八月二日（水）

開会式に先立ち、桜丘高等学校ダンス部が迫力のあるパフォーマンスを披露、会場に大きなどよめきが起きました。開会式では、山本隼彦連盟会長や朝倉政彦実行委員長の挨拶に続き、佐原光一豊橋市長様よりご祝辞をいただきました。開催地の基調提案では、「立ち向かう子ども」を旨としてというテーマで、豊橋市立青陵中学校浅井英雄校長が豊橋市体育研究部の取り組みについて概要を説明しました。続く開催地研究発表では、豊橋市体育研究部の具体的な活動内容を説明する中で、豊橋市立下地小学校二年生児童が「下地つ体操」を、旭小が「旭小児童がリズムなわとびを披露



ご講演される白旗和也先生

し、会場からは称賛の拍手が送られました。

午後の班別研究会では、三河地区から助言者・司会をはじめ、多くの先生方が発表者となり、思いの詰まった実践を全国に発信して、参加者から高い評価を得ることができました。過去最多となる全十七会場において、熱気に満ち溢れた研究協議が繰り広げられました。

第二日・八月三日（木）

白旗和也先生による特別講演では、新学習指導要領の方向性や学びを深めるための授業構想に関して講話をしていただきました。特に、体育の価値を高める課題設定及び課題解決のプロセスの重要性を具体的に示唆いただきました。

本年度は全国小学校体育科教育研究会との共催ということで、三河全域の先生には大変お世話になりました。また、当日の運営をしていただきました各地区の先生方にも深く感謝申し上げます。

全小体の実技発表で学んだこと

豊橋・旭小 藤田 裕誉

今回、旭小の子どもたちと共に実技発表をやりました。子どもたちの姿を全国から集まっていた先生方に見ただけだということに緊張しました。子どもたちとは休み時間も授業後も一緒に練習をしました。うまくいかずに悩み、苦しんだことの方が多かった気がしましたが、当日演技を終えた後、子どもたちの満足気な顔を見て、安心したのと同時に、子どもたちを信じることの大切さを学んだ一日でした。貴重な体験に感謝しています。

知立支部

から衣きつなれにしつましあれば
はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

知立市小中学生百人一首大会実行委員会

本市では、毎年一月、市内在住の小中学生を対象にした百人一首大会が盛大に行われます。主催は知立市教育委員会、企画・運営を、教員代表、愛知県からた協会・百葉会の代表等からなる実行委員会が行いますが、庶務は文化課・学校教育課が担当し、市をあげての恒例行事となっています。また、講師（読手）には、例年、愛知県からた協会会長の伊藤孝男先生をお招きし、その門下のお弟子さんや百葉会メンバーにも審判陣としてご尽力いただき、本格的な競技かるたに取り



読手の声に耳を傾ける参加者

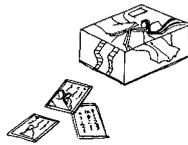
組んでいます。

知立市には、『伊勢物語』の中で在原業平が「かきつばた」の折句を詠んだと伝えられる八橋伝説があり、愛知県の県花がカキツバタに制定されているのは、この故事にちなんでいると言われている。この例をはじめ、知立市は、古からの豊かな歴史と文化を築き育む風土を大切に受け継いできています。今後も市と市民、及び知立市に関わるすべての人が、様々な文化芸術活動を継承、発展させるために、現在、「知立市文化芸術条例」策定に向けて準備を進めているところです。

私たち教員も、その文化芸術を創造していく子どもたちとともに、その一翼を担うべく努力することが必要であると考えています。今回ご紹介している「知立市小中学生百人一首大会」は、発足当時の主催者「文化協会」から現在の「市教委」へとその主催者の変遷はありましたが、その間ずっと、子どもたちが百人一首を楽しむ機会を大切にしてきました。今後も子どもたちが、和歌に触れ情緒を豊かにし、競技かるたを通して集中力を高めるなどしていつてくれることを期待し、微力ながら教員の立場から努力してまいりたいと思います。

（文責・三浦啓作）

支部 トピックス



安城支部

双方向発信

「one ボランティア」活動
安城市立安城南中学校

本校は安城市の中心に位置し、願い事日本一を誇る「安城七夕まつり」が開催される安城駅・南安城駅周辺から、「日本デンマーク」と称されたかつての田園風景が残る安城産業文化公園デンパークまでの十六町内会を擁し、五つの小学校から入学者を迎える広大な学区をもつ大規模校です。市街地から郊外まで多様な顔を持つ地域ですが、出身者は母校愛に溢れ、協力を惜しみません。

私たちは、地域が本校を支えてくれることに喜びを感じ、生徒の目に見える形で学校が地域に支えられていると意識させられないかと、保護者・地域を対象にした「one ボランティア」を始めました。十年ほどの歴史を持つ読み聞かせボランティアを始め、募集分野を図書館環境整備や白衣修繕など十種類以上に増やし、保護者の得意分野での協力を可能にしたところ、協力者はのべ三百名ほどに拡大しました。さらに回覧板で地域にも協力を依頼すると、卒業した生徒の親や

学生にその輪が広がり、学校教育活動全体が充実してきました。

生徒も地域の熱い支えを感じ、人のための活動に協力を惜しまなくなりました。「back to our hometown」が合言葉の「中学生による one ボランティア」は、校内ボランティアに端を発し、今や町内会や市の行事にも参加します。掲示板で示す情報を見て自ら応募をする生徒は年間のべ三百名超。今や町内の活動に安城南中学生が活躍する生徒も増えていきます。

地域を愛する生徒と学校を誇りとする地域に支えられた本校。この関係を大切に双方向で支え合うことで、今後も卒業生がこの地を故郷として愛し、世界各地で活躍することを期待してやみません。

（文責・松永博司）



地区防災訓練で活動する中学生 one ボランティア

研究校紹介

自他の違いやよさに気づき、思いやりの心をもてる子
心に響き、心を動かす指導の工夫

蒲郡市立西浦小学校

本校は、三河湾の西浦半島、観光地として有名な西浦温泉、古くから栄える漁港の町にある小学校です。海、森などの自然豊かな環境の中、全校児童数二百四十五名のアットホームな学校です。

一昨年度より蒲郡市教育委員会から「学習指導研究会」研究領域指定校(道徳)の委嘱を受け、主題を「自他の違いやよさに気づき、思いやりの心をもてる子」

心に響き、心を動かす指導の工夫」と設定し、道徳の授業の在り方を見直し、「考える道徳」「議論する道徳」の充実に努めたいと研究に取り組んできました。

昨今、道徳教育の重要性が様々な場面でも話題になっています。本研究では子どもも道徳性は、学校・地域・家庭の中で学び育っていくものとして捉えています。そこで、本校の地域や家庭との交流が多く結びつきが強いという利点を生かし、「西浦で学ぶ、西浦の道徳」をつくっていかうと考えました。さらに、他の教科・領域と絡めた道徳教育の計画を見直し、実践することを通して、めざす子どもの姿に迫りたいと思っています。

地域や家庭を巻き込んだ道徳教育を構想することで、子どもが自分と周りの環境との関わりの中で道徳的諸価値の理解



西浦の伝統「チャラボコっていいね」

を深め、西浦への誇りや愛着をもつことにつながることを期待しています。また、子どもが保護者の意見を聞いたうえで授業に臨んだり、教師が保護者にアンケートを実施し授業を構想したり、学級通信や学校ホームページ等で道徳の授業における子どもへの思いを発信し、家庭でも話し合うきっかけにしたりしています。

十月三十一日(火)に学習指導研究会を開催します。当日は、全学級が公開授業を行います。また、本研究をご指導くださったっている愛知教育大学の鈴木健二教授の講演もあります。多くの先生にご参観いただき、ご指導いただければ幸いです。

(文責・伊藤松二)

私の研究

言葉を手がかりに心情を読み取り、「考える力」を育む国語学習

小3年『サーカスのライオン』
～「ピカッとじんごのキーワード!じんごの気持ちを考えよう」の実践を通して～

田原市立野田小学校 藤原 将吾

一 はじめに

現代の著しい社会変化は、人々の生活を向上させる一方で、先の読めない時代も作り出しています。その未来を生き抜く子どもに対し、国立教育政策研究所は「二十一世紀型能力」と銘打ち、思考力を中核にした新しい教育を提案しました。新学習指導要領においても、この考えが踏まえられ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の資質・能力が柱と なっています。国語教育

では、子どもは基礎的な「学習スキル」を習得し、それを活用しながら「思考・判断・表現」をする活動を通して、主体的に学ぶ力を身につけることが重要視されると考えます。そこで、学級の実態と今後の国語教育の方向性を踏まえ、本研究主題を掲げました。

二 実践について

(一) 基礎・基本となる学習スキルの習得
物語文を正しく読み取るには、本文の言葉に着目して登場人物の心情を考えることが大切であると考えます。

そこで、各場面の本文と自分の考えを書きスペースを一枚にまとめたワークシートと「消せる蛍光ペン」を用いて学

習を進めました。初発の感想で子どもが抱いた疑問から学習課題「みんなのはてな」をつくり、主人公の心情が分かる言葉「ピカッとじんごのキーワード」と名付けることで、本文の言葉を手がかりにして主人公の思いに迫っていきました。消せる蛍光ペンを使用したことで、言葉を目立たせたり、間違いを直したりすることができ、子どもは思い切った学習に取り組み、読み取る力を身につけました。

(二) 「考える力」を育む学習サイクル
学習スキルを習得する個別追究「ひとり学習」↓意見交流を行う「みんな学習」↓自分の学びを振り返る「見つめるタイム」といった学習サイクルを展開し、物語の読み取りを通して子どもへの思考を促しました。物語の山場では、それまでの学習や考え方を生かして「思考・判断・表現」する応用的な課題を提示することで、「考える力」の伸長を図りました。子どもは学びを深めるにつれて物語の世界に入り込み、主人公の心情に迫ろうと意欲的に考え、学び合うことができました。

三 おわりに
本研究では、子どもは物語の読解を通して、「考える力」を高めていきました。子どもの国語力が高められるよう、今後にも広い視野をもった研究を進めていきます。



「ひとり学習」に取り組む子ども

教室の窓から

アルプホルンの音が響き渡る学校

新城市立鳳来東小学校

北河伸太良

本校は、新城市の北東部に位置し、山々に囲まれた校区には、乳岩峡・宇連ダム・大島ダム・日帰り温泉施設のうめの湯などがあります。完全複式校で、一・二年生は七名、三・四年生は七名、五・六年生は五名、全校児童十九名の小規模校です。

鳳来東小の学校生活は、五・六年生がアルプホルンで吹鳴する「チャイム」でまります。五・六年生は登校すると身支度を整え、アルプホルンを準備して待ち構えます。そして、始業時間の八時十分きっかりにアルプホルンを吹鳴します。このチャイムで運動場や廊下にいた子どもたちは教室に入り、一日の学校生活をスタートさせるのです。

アルプホルンの由来は、一九九〇年にPTAと地元の人たちがヒノキの間伐材を使って製作したことにさかのぼります。「この住民は山と暮らし、森林に生かされてきた。子どもたちに山や森に愛着をもってもらうため、木材を使って何かをしたい」という地域の方たちの想いを受け、三年がかりで根元の曲がった木材を採し出し、縦に割って厚さ五ミリほどに掘り進めることによって、十本ほど製作



山々に響け アルプホルン

されました。以来、五・六年生によって毎朝のチャイムの吹鳴が引き継がれてきています。子どもたちは、マウスピースのみによって音程を変化させるため難しいと言いつながらも、アルプホルンの響き渡る独特な音色に惹かれ、たくさん練習に取り組んでいます。また、五・六年生にとつては、この音色で学校をリードしていうとする気持ちが進められています。

今年七月には、本場スイスの公共放送局RSIの撮影スタッフがドキュメンタリー番組を制作するために来校したり、一学期の終業式の様子をCBCテレビで取り上げていただいたりしました。

地域の方たちの想いを受けて始まったアルプホルンの吹鳴。その時々の子どもたちが自分の想いをのせ、山々に響き渡らせてきた音色を伝統として続けながら、これからも地域に根ざした教育活動を推進していきたいと考えています。

今後の研究会のご案内

*愛知県社会科教育研究会

「社会に参画していこうとする子ども」の育成をめざし、仲間とかわりながら問題の解決を図る社会科の授業」
10月24日(火) 田原市立田原東部小学校・田原市立神戸小学校・田原市立東部中学校

*愛知県小中学校音楽教育研究会 蒲郡大会

「豊かに感じ 表現する子」
「ともに学び、ともに楽しむ音楽の授業」
10月24日(火) 蒲郡市立蒲郡北部小学校

*第55回愛知県へき地教育研究会

「ふるさとで心豊かに学び、新しい時代を切り拓く子ども」の育成―学校の特性を生かした学校・学級経営と学習指導の深化・充実―
10月24日(火) 豊根村立豊根小学校

*愛知県英英語教育研究会

「心豊かなコミュニケーションをめざして」
10月25日(水) 岡崎市立竜海中学校・岡崎市立六名小学校

*平成29年度愛知県造形教育研究会総会・第54回愛知県造形教育協議会

「三名の研究発表者による自主的な研究テーマ」
11月8日(水) 刈谷市総合文化センター
*第55回愛知県道徳教育研究会 岡崎大会
「豊かな心をもち、21世紀をたくましく生き抜く子どもの育成」
11月8日(水) 岡崎市立竜美丘小学校

*愛知県統計教育研究発表会・講演会
「生きる力を育てる統計教育」

11月29日(水) 日本特殊陶業市民会館
*愛知県生徒指導研究会
「豊かな心と社会性を育む生徒指導を目指して」
11月29日(水) 名古屋文理大学文化フォーラム

編集後記

台風五号に始まった八月。猛烈な暑さのあと、雨や曇りの日が続き、各地で局地的な豪雨の被害が出るなど、夏らしくない夏となりました。

今夏も、各分会・委員会では、魅力と実効性のある研修会や研究会が開催され、「指導力をつけたい」、「授業力を向上させたい」と願う教師が集まりました。新学習指導要領実施に備えた先行的な実践報告を基に、参加者による熱心な話し合いが行われました。研修では、情報の収集や分析が中心となります。そこから個々に何をすべきかを決め、実践していくことが本来の目的です。常に活用を意識して、教師として授業で勝負できる力量を身につけていきたいものです。本号では、研修会や研究会の様子を中心に編集してお届けします。研修成果を現場に生かす一助になればと願い、速報の役割も意図しました。秋からの実践や年度末のまじめに向けての一助となれば幸いです。

◆表紙の写真◆

「子ども彦左登場!」

撮影 幸田町立幸田小学校

小嶋 智香 先生

◆カット◆

愛知教育大学附属特別支援学級

神谷 宣欣 先生